

著者・あとがき

『あめいろく高齢者医療』、いかがだったでしょうか。きっと多くの衝撃的な発見があったのではないのでしょうか。それもそのはず。かくいう私もアメリカでの老年科研修で、自分の医療に対する考え方が大きく変わったからです。

この本を読まれている勉強熱心な皆さんはきっと、フィジカルを大事にし、鑑別を広く挙げることができ、検査の感度・特異度を熟知した、いわゆる「できる医者」を目指しているのではないのでしょうか。自分も日本で内科医として勤務していたときはそうでした。でも、

それら従来の内科的スキルだけでは 虚弱な高齢者に「ベスト」な医療を提供することができない

ということに、当時は全く気づいていなかったのです。ある高齢の患者さんに対して、グラム染色で肺炎球菌を見つけ、ペニシリンで肺炎を治療して得意になっていましたが、その患者が寝たきりになってしまい、退院先がみつからないことを気にもとめませんでした。「先生、私はもう十分に長生きしたから、あとは楽に逝きたい」と外来で訴える背の曲がった小さなおばあちゃんに対しても、「何、言ってるんですか…、まだまだ長生きできますよ」と受け流すのみでした。そしてその患者が敗血症性ショックで搬送されれば、「血培2セット、生食全開！」と看護師に檄を飛ばし、あばれないように腕を皆で押さえつけて、20Gの針を刺している自分がいたのです。

そうです。私がみていたのは1人の人としての患者ではなく、病気の集合体としての「症例」でしかありませんでした。患者にとっての「ベスト」を知ろうとせず、医療者にとっての「ベスト」を押し付けていただけだったのです。

医療の起源はずっと遡ると、猿の毛づくろいに行きつくそうです。有史以来も他者を思いやる医療は、長らくまじないの域を出ませんでした。それでも人類

がヒトになる前から痛み苦しむ者に対して慰めを提供してきました。それが17世紀のルネッサンスを機に科学という強力な武器を手に入れ、病気のメカニズムが解明され、多くの疾患を治癒できるようになりました。しかしその結果、医療の対象は「患者そのものの治癒」から「疾患の治療」へと焦点が移ってしまったのです。

進化とは、環境の変化に合わせて適応していくことです。超高齢社会という環境の激変に直面している現在、医療はさらなる進化を促されていると感じます。すなわち、

従来の病気へのアプローチを大事にしつつ、 さらに1人の人としての患者へも焦点を当てていく医療への進化

が必要になっているのです。そして老年科は、その進化において鍵となるはず

です。

執筆の機会をくださった反田篤志先生に御礼申し上げます。共著者の樋口雅也先生、一緒に仕事ができて幸せでした。そして編集部の程田靖弘様は「こんな締切、守れるかー!」とあって、私が逆ギレしたにもかかわらず(苦笑)、諦めることなく大人の対応をしてくれ、私の文章を珠玉の原稿にまで高めていただきました。

本書をきっかけにして、1人でも多くの高齢者に真の意味での「ベスト」な医療が提供されることを切に願っています。

2020年7月吉日

ハワイの青碧に輝く海を眺めながら

共著 植村 健司